

地域づくりの新しい考え方「観光まちづくり」

持丸伸吾

観光活動は自然、文化、社会などに広範な影響を与えうるが、そのような理解を欠く短期的利益を目指した活動により、観光資源の摩耗、来訪者の満足度の低下、住民の不利益の発生などの失敗が積み重ねられてきた。本来、観光活動はまちづくりのなかで適切にとらえられるべきである。今後は、地域の持続的な発展に向けて、「観光地づくり」と「まちづくり」を一体的に行う「観光まちづくり」という考え方のもとに活動を進めていくことが重要である。

■「観光地づくり」と「まちづくり」の一体化

地域間交流の振興と経済的な安定性をもたらす21世紀の基幹産業として、観光産業への期待が高まっている。特に、わが国の中山間地域をはじめとして、立地条件や資源などの面で恵まれず、経済的な発展が遅れている地域では、観光産業に対する期待が大きい。

しかし、これまでの観光地づくりでは、短期的な集客を目指すあまり、長期的なまちづくりという視点を欠いた例がしばしば見られた。そのような観光地では、短期的には観光客が増加するものの、長期的には、

観光資源の摩耗

来訪者満足度の低下

住民の不利益

といったさまざまな問題を引き起こす結果となっている。

すなわち、観光地としての魅力が低下することによって、観光資源がダメージを受けたり、観光客が減少するだけでなく、地域住民が不利益を受ける例が多い。

そのような近視眼的な観光振興が長期的な地域全体の衰退をもたらさないようにするためには、「持続的な発展が可能な観光地づくり」という考え方が必要である。これは、「観光地づくり」と「まちづくり」を一体的に行うことにより、観光資源を劣化させることなく、将来にわたって住民の満足、来訪者の満足を維持し、向上させることを目指すまちづくりの考え方である。

■「観光まちづくり」の考え方

「観光まちづくり」に向けて必要な取り組みについて、国内外の事例をモデル化してみると、次の点が必要である。

(1) 資源の持続性、来訪者の満足度、地域社会の持続性

「観光まちづくり」を実現していると考えられる多くの先進事例では、資源、来訪者、地域社会のそれぞれの持続性に配慮したまちづくりを行っている。

資源の面では、自らの地域の資源を適切に把握したうえで、資源を保全・活用していく仕組みや、維持・管理していく仕組みが確立されている。英国のストーンヘンジのように、資源の需要限度に基づく、入り込み客のコントロール

が行われている例もある。

来訪者の面では、来訪者のニーズの変化に応じた、地域のホスピタリティの向上が重要である。リピーターを定着させることが、古くて新しい課題である。

地域社会の面では、社会基盤の整備を進め、イベント等を催して来訪者と住民の交流を深めるなど、観光活動の活性化による経済的な効果を、まちに還元する仕組みをつくる必要がある。

重要なのは、住民参加のもとに地域が主体となってこうした取り組みを進めることにより、住民の満足のもとでまちが持続的に発展していく仕組みが形成されていることである。住民自らが誇りを持てる豊かなまちが実現することで、地域固有の魅力を発信できるようになり、そこを訪れる来訪者の満足度も高い状態が維持されることが考えられる。

表1に示すように、資源、来訪

者、地域社会という3つの要素にかかわるマネジメントは、それぞれ関連している。「観光まちづくり」を成功させるためには、3つの要素がそれぞれ高め合うという好循環を実現する必要がある。

(2) PLAN-DO-SEE(計画・実行・検証)型の取り組み
「観光まちづくり」を効果的に推進するためには、資源、来訪者、地域社会の状況をモニタリングし、適切に制御するPLAN-DO-SEE型の取り組みが重要である。施策の実施後の結果を検証したうえで新たな対応策(計画)が、「観光まちづくり」を進めていくなかで、有効な手法として機能すると考えられる。

(3) 中長期的に見たまちの発展段階に応じた取り組み
「観光まちづくり」の取り組みでは、まちが直面している問題の段階、発展段階ごとに、とるべき対策や、課題の解決方策を変化させ

ていくことが重要である。

中長期的に見た場合、先進事例の取り組みは、直線的な成長、発展形態ではなく、らせん状の段階的な取り組みであった。まちの発展段階に応じて取り組みを変化させていくことにより、長期的な視点でのまちづくりを実現している。

■「観光まちづくり」の推進に向けて

図1に「観光まちづくり」のモデルを示す。実際に「観光まちづくり」を進めていくに当たっては、以下の3つの点が主要な課題になると考えられる。

(1) 多様な主体の参画のもとでの推進

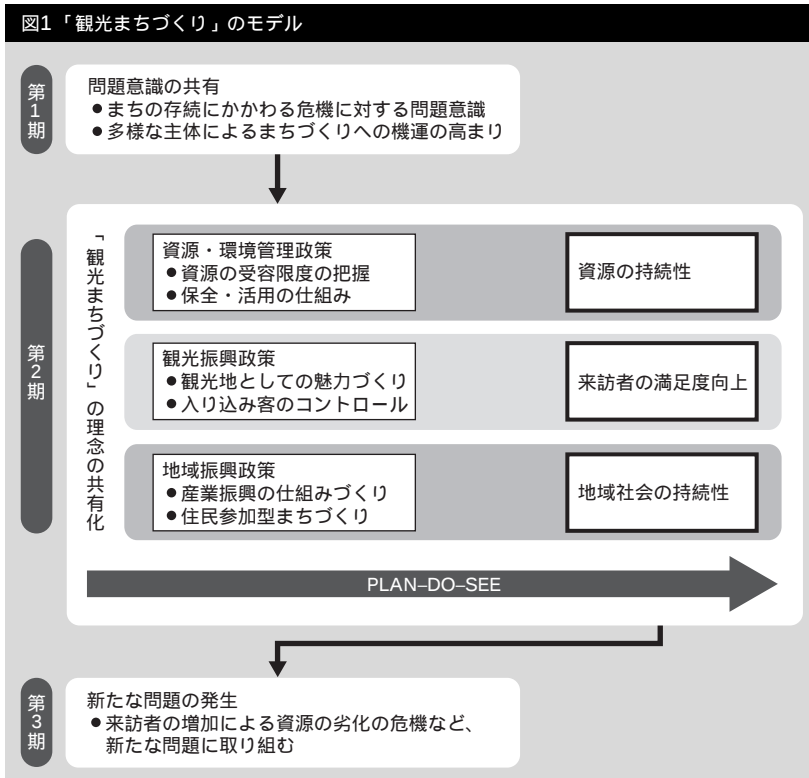
「観光まちづくり」を進めていくに際しては、観光関連の事業者や行政だけではなく、住民やNPO(非営利機関)など、考え方や価値観の異なる多様な主体の参画のもとで進めていくことが重要である。

これまでの観光地づくりは、とすると観光産業の振興策となり、まちづくり全体のなかで適切にとらえられなかったため、失敗を重ねてきた。過去の多くの失敗事例をふまえ、まちづくりを多様な主体の参画のもとで一体的に推

表1 「観光まちづくり」の3つの視点と実現の方向

資源の持続性の実現に向けた方向	来訪者の満足度の持続的向上に向けた方向	地域社会の持続性の実現に向けた方向
資源の保全、活用の仕組みの確立 維持・管理の仕組みの充実、強化 来訪者のコントロールの仕組みの確立	来訪者のニーズ変化への対応の仕組みづくり 来訪者に対するホスピタリティの向上	資源の魅力の高度化 経済効果を波及させる基盤の整備 まちづくり施策の展開、居住地としての魅力の向上

図1 「観光まちづくり」のモデル



進していくことが、大きなポイントである。

（２）幅広い政策の展開

「観光まちづくり」が、これまでの観光地づくりと異なるのは、まちづくり全体を視野に入れた幅広い政策を展開することにある。つまり、高齢化社会への対応、地域住民の生活環境の向上といった政策と観光政策とを一体的に行うことによる、相乗効果を期待できるような施策展開が重要である。

そのような施策の展開によって、「観光まちづくり」は、社会

基盤の効率的な整備を可能にするだけでなく、人材の有効活用や住民の地域への誇りの意識の醸成といった面でも大きく寄与すると考えられる。

（３）地域経営的な意識の醸成とキーパーソン

ほぼすべての成功事例に共通していることとして、自らのまちを大切にし、経営感覚に優れたキーパーソンの存在があげられる。キーパーソンによって、地域の個性や魅力が観光活動のなかで現代的意義づけを与えられて、まちが輝

くのである。

英国の産業革命を象徴する橋梁で知られるアイアンブリッジでは、新都市開発公社の職員がキーパーソンの役割を果たした。所属する組織を問わず、そのようなキーパーソンを発掘して育てることが重要である。

■ 地域の個性を活かす 「観光まちづくり」

今後、国内外の観光は、観光対象や観光活動がますます多様化し、SIT（Special Interest Tourism）と呼ばれる特定の興味関心に基づいた観光形態が増加していくと考えられる。そのような流れのなかで、地域（くに）の光を見するという観光本来の意義が重みを増してくる。

それだけに、地域の個性を観光の魅力とする、「観光まちづくり」という考え方が肝要である。そのような「観光まちづくり」の推進に向けて、本稿で指摘した考え方が参考になれば幸いである。

『NRI Research NEWS』

1999年9月号より転載

持丸伸吾（もちまるしんご）

行政システム研究部副主任研究員